

恩納村の道のあゆみ

私たちが普段利用している道は、環境や人々の暮らし、また歴史的な出来事によって新しく開通したり、整備されたりしてきました。今回は恩納村の道の歴史をみてみます。

【恩納間切時代（1908年より前）】

恩納間切を往来する人々は宿道、脇道、原道を使って移動していました。宿道は現在の国道のようなもので、首里から地方へ通された主要な道でした。恩納間切を通る宿道は首里から浦添、北谷、読谷方面を通って恩納間切に至り、名護、本部、今帰仁へ向かうルートでした。読谷山間切（現在の読谷村）の喜名番所から本部へ向かう区間は「国頭方西海道」と呼ばれ、村内の真栄田の一里塚（宿道には1里ごとに塚が作られていた）から仲泊の一里塚までは、現在、国指定史跡となっています。

脇道は宿道の通っていない村々や東西の宿道を連結する道で、現在の県道に近いものでした。恩納村では金武町への道や真栄田、塩屋、宇加地から読谷村へ通じる道などがこれにあたりました。原道は現在の村道のようなもので、こちらは各ムラ（現在の字や区）が管理していました。

【戦前の道路】

1908（明治41）年に沖縄県及島嶼町村制によって恩納間切は恩納村になりました。この頃から宿道にかかる県道（現在の県道とは異なる）の建設がはじまります。村民や周辺地域の人々も工事にあたりました。重労働でしたが、給与を求めて男女ともに工事に参加したそうです。建設は数年かかり、1914（大正3）年頃に伊武部まで通ったと言われています。この工事で谷間だった恩納区の船越が埋められました。県道が開通すると、荷馬車や客馬車、自動車も通るようになりました。1922（大正11）年には嘉手納から軽便鉄道が開通したため、荷馬車で

嘉手納まで貨物を輸送しました。



1号線に建てられた道路標識（沖縄県公文書館所蔵）

【戦後】

（昭和29）年、本土の大手企業によって道路改修工事が行われ、那覇ー名護間のアスファルト舗装が完成しました。1号線は那覇市明治橋から国頭村奥までの幹線道路で、那覇から読谷までが軍道路、読谷から名護までは軍営縫道（のちに軍道）、名護以北が政府道路という管理に分けられていました。恩納村を通る部分は軍営縫道にあたりました。軍営縫道とは、政府道でありながら維持管理は米軍が行う道のことでした。

米軍はアメリカ本国の道路番号の付番をもとにして、沖縄本島を縦断する道には奇数番号、横断する道路には偶数番号を付けました。現在の国道329号は13号線、仲泊から旧石川市東恩納への道路は6号線でした。主要な道路には米軍による道路標識が立てられました。

復帰直前の1971（昭和46）年頃、北部縦貫道路建設の話が持ち上がりました。これは1975（昭和50）年に本部町で開催される沖縄国際海洋博覧会の関連事業で、当初は恩納村もルートに入る西側コースが想定